夢球児と挑む

県内高校の監督たち ❻

諦めず続ける姿勢伝える

下諏訪向陽 新井 利尚さん(42)

高校でエース、独立リーグ挑戦を経て

「伸びる時期は人それぞれ。今はレギュラーでなくても駄目だと思わず、諦めず立ち向かってほしい」。下諏訪向陽高の新井利尚監督(42)が熱っぽく語る。中学は控えの選手、高校でエース、プロ野球独立リーグ挑戦…。自身が歩んだ競技人生そのものが、指導者としての原点だ。

上伊那郡宮田村出身。宮田小4年で野球を始めた。宮田中では公式戦で最後に代打で出場した1打席だけで、見逃しの3球三振に終わった。

伊那北高で内野手から投手に転向。1年秋ごろ、試しに横投げにしたところ、変化球が想像以上に曲がった。フォームを変更すると球速や切れも増し、2年秋にエースとなった。3年夏は3回戦敗退だった。

三重大でも野球を続け、指導者を考えるようになったのはこの頃。会社勤めの監督に代わり、試合でサインを出すことも。「練習で改善したことが結果に出たり、サイン通りに試合を運べたりできると面白い」。卒業後も三重県内の養護学校で働きながら三重大の外部コーチを務めた。

指導に熱が入る下諏訪向陽高の新井監督（右）

一方でプロ野球への夢も抱いていた。社会人2年目の2004年、四国アイランドリーグ（現四国アイランドリーグplus）が翌年の開幕に向けたトライアウトを実施すると聞き、「そこで駄目だと言われれば諦めがつく」と挑んだ。合格し、香川に入団した。

2勝6敗に終わり、1年で戦力外となった。それでも野球に向き合った経験は大きな財産となった。その日の状態に応じてどの球種で攻めるのか、バッテリーのコミュニケーションの重要性、軸足の使い方…。監督になって10年目の今に生きている。

教員採用試験に合格した翌09年に丸子修学館高に赴任。14年に上田千曲高で初めて監督になった。「自分が勝たせる」と思うあまり選手の自主性や力を引き出せず、最初の3年間の長野大会は初戦敗退。そこで自分を見つめ直し、休日に関西の指導者を訪ねるなど指導法を学ぶと「一歩引いて全体を見られるようになった」。17、18年の長野大会は16強入りした。

夏の大会に向けた6月。練習では選手たちと言葉を交わし、投球や打撃のフォームを指導した。「高校生はプロと違い、負けたら終わり。期限のある高校生の世界は厳しい」と強調する。

今春卒業した3人が大学で野球を続けている。高校時代はレギュラーでなかった選手もいて、「続けていることが一番うれしい」。目立たなかった自身が高校でエースとなり、プロにもなれた。その歩みを時に思い起こしながら、可能性あふれる球児と向き合う。

（早戸 達哉）